

## 犬飼物語（丹南町）

福知山線篠（ささ）山口駅から西へ一キロメートル余り行ったところに、犬飼村の大年神社があります。

この神社には人身御供（ひとみごくう）の伝説が残っています。

むかし、ある年氏子（うじこ）の中に五人七人と行方不明者ができました。これは神のお怒（いか）りの禍（わざわい）であると言って、氏子連中が相談して、人身御供をあげることに決め、くじを引いて、祭の夜に供（そな）えることにしました。

ある年の犠牲者（ぎせいしゃ）にあたった家ではたいへんかなしみ、なんとかこの災難（さいなん）をのがれようと、ただ一心に神にすがり、三七日の祈禱（きとう）をしました。その満願の明け方、一人の童子が現われ、神のお声を伝えました。

「氏子の悲嘆（ひたん）を聞くに忍（しの）びず、霊験をもって汝等（なんじら）に教えよう。江州多賀明神（ごうしゅうたがみょうじん）は伊弉冉命（いさづみのみこと）を祀（まつ）り、江州犬上郡にあり、元この宮も人身御供の災（わざわい）があった。鎮平犬（ちんぺいけん）という犬が化生（けしょう）の物を退治し、この厄（やく）をのがれた。今もこの犬が犬上郡にいる。借りてきて、例祭の時この犬を器（うつわ）に入れて置け。神は不思議な力をこの犬に与えるであろう。」

これを聞いた村人は大いに喜び、神託（しんたく）の通り犬を借りてきて、箱に納め、しめを飾り神前に供え木のかげにかくれ刀（かたな）を構（かま）えて待っていました。

夜半になって、天地をゆるがす大音とともに怪物が現われ、拝殿に躍（おど）り上り、供物（くもつ）に手をかけるやいなや、中にいた鎮平犬がすごい声を出しながら、怪物にかみつきともに縁から落ちてきました。上になり下になり、ころげまわる怪物を見て、隙（すき）をうかがい数太刀（たち）切りつけ、見事怪物を退治することができました。怪物は三眼の大狸だったということです。

その後鎮平犬は大切に村で飼われ、村名もこのことから犬飼村と改められました。

